

# 双生児と学校に関する一考察

－保護者の声からの検討－

附属中等教育学校 南 澤 武 蔵

A Study of the Effects of School on Twins  
－Considerations from Articles Submitted by Parents－

Musashi MINAMISAWA

The purpose of this study is to examine how school and school life affect twins. Traditionally, it has been suggested that twins should attend separate schools. However, in the Secondary School attached to the Faculty of Education, twins have attended the same school, and each has developed as an individual. To investigate and compare the influence of attending the same school and separate schools, we analyzed articles submitted to the Twin Mothers Club newsletter with a qualitative data analysis method. The result of the analysis was further examined through the comparison with knowledge and insights that the Secondary School attached to the Faculty of Education has accumulated. The analysis showed that twins who had emotional conflicts about attending the same school decided to go to separate schools and thereby built a better relationship between them. In addition, the analysis also indicated that twins' personality and the understanding by others are important factors in their school life.

## 目 次

1. 研究の背景
2. 双生児の研究と学校：先行研究
3. 研究の目的
4. 研究のデータ
  - A. 対象
  - B. データ収集
5. 分析方法
  - A. 方法
  - B. 本研究における分析の手順
6. 分析結果
  - A. 同一の学校に通う双生児
  - B. 別々の学校に通う双生児
7. 考察
8. 今後の展望

謝辞

注

## 1. 研究の背景

本稿の筆者が勤務する東京大学教育学部附属中等教育学校（旧名は東京大学教育学部附属中・高等学校、以下「附属中等教育学校」と表記）は1948年の学校創

立時から双生児（双子、ふたご）の募集を行い、双生児研究の拠点となってきた<sup>1)</sup>。現在も校内には双生児研究委員会があり、研究の蓄積が続けている。

近年、双生児をはじめとした多胎児の出生率は高まり、双生児の出生率はこの30年で約2倍になったとされている<sup>2)</sup>。出生率は一卵性双生児が0.4%程度であり、これは人種差がないとされている。一方で、二卵性の双生児では人種差もあり、北欧の出生率が1.5～2%であるのに対して日本は0.6～1%となっている<sup>3)</sup>。そして、近年増えているのは、この二卵性の双生児である。要因としては生殖医療、いわゆる不妊治療に用いられる排卵誘発剤の影響が指摘されている<sup>4)</sup>。

双生児は単胎児（一般児）に比べて考えれば出生率が低く、社会の中でマイノリティであることは否めない。そのため、1960年代ごろまでは偏見的な見方がされていた<sup>5)</sup>。また、子育ては一人でも大変なことが多いが、一度に二人を育てる双生児の子育ては単胎児の子育てとは異なる大変さや問題がある。その問題の解決方法やサポート体制については研究が続けられており、必要性が訴えられている<sup>6)</sup>。

現在、附属中等教育学校には約50組の双生児が在籍している。これまで1000組を超える双生児と多胎児

(三つ子) が在籍してきた<sup>7)</sup>。この双生児を対象とした研究の中では、中等教育段階の双生児に関する研究がされてきた。附属中等教育学が双生児研究において特徴的であるのは、やはり学校という環境にある。例えば、日本には他にも複数の双生児のレジストリがあり、代表的なレジストリは大阪大学大学院医学研究科附属ツインリサーチセンターである<sup>8)</sup>。しかし、日本のみならず、世界的に見ても学校環境として双生児が一定数、常時いる機関は稀有である<sup>9)</sup>。そのため、附属中等教育学校では学校というフィールドを活用した様々な研究が実践され、データが蓄積されてきた。

今後も双生児の出生数や割合は増えることが予測される。出生数が増加した結果として、附属中等教育学校以外の一般の学校においても今以上に学校内における双生児の割合が増加し、学校(教師や生徒)と双生児とが接点をもつ機会が増えると考ええる。その際に、学校環境は双生児の成長にどのような影響を与えるのだろうか。双生児には一般児とは異なる双生児特有の問題が生じ、それに対処することが求められるようになる。学校や教師が双生児に対してどのような配慮が求められるかを考えておく必要性が高まっている。

## 2. 双生児の研究と学校：先行研究

双生児と学校に関する研究は附属中等教育学校で蓄積されてきたと言える。附属中等教育学校は1948年の創立に際して、旧制東京高等学校を双生児研究の拠点とする形で新制の東京大学の附属校とした経緯がある<sup>10)</sup>。初期の研究は「文部省科学研究費総合研究双生児研究班」が組織され、精力的に進められた。そして、その後も研究者が附属中等教育学校をフィールドとして研究の蓄積を進めてきた。附属中等教育学校における研究の基本は学校における双生児の研究である。

1960年代には「双生児による人格形成の研究」が附属中等教育学校をフィールドに実施された<sup>11)</sup>。研究の中では、双生児間の関係や友だちとの関係について論じられ、双生児の相互未分化の問題や相手が友だちの役割を果たしていることが明らかにされた。この研究は約30年後の1990年に比較調査が実施され、相手が友だちの役割をしてしまうことの問題点と、二人の関係の疎密が他者との結びつきにも影響することが指摘された<sup>12)</sup>。また、二人の間の競争意識に関する研究も附属中等教育学校の生徒を対象として調査が実施され、学校における成績との関連も研究された<sup>13)</sup>。

しかし、学校や学校生活に関する研究は成績や部活

動などに焦点を当てて行われたものはあるが、学校という空間・環境が双生児に与える影響を検討した研究は少ない。これまでの研究では、思春期の双生児には学校を別にした方が望ましい場合や二人に配慮が必要な場合があると指摘されている<sup>14)</sup>。双生児の親でもある研究者の天羽幸子も中学から別の学校に進学したことが、結果としてそれぞれにとって良い方向に作用したと述べている<sup>15)</sup>。

ツインマゼースクラブ(後述)の会員を対象に1999年から2015年にかけて行われた菅原ますみの研究では「思春期のふたご」に関する報告もされている。その中で思春期の双生児の一人ひとりの個性化に関係する要因として家庭の物理的要因や親子関係、学校要因、友人適応などをあげ、学校要因としてはクラス程度の違いでは見られないが、違う学校に通うペア間には自己志向性と外在型問題(攻撃性・不服従)に有意な差が出たことを指摘している<sup>16)</sup>。同じくツインマゼースクラブの会員へのアンケートから、母親が観察した双生児の競争意識を分析した研究において、天羽は競争意識の変化に学校を環境的条件としてあげ、二人の学校が別になり、周囲からの比較が少なくなると、お互いに自立していき、競争意識が弱くなる傾向を指摘した<sup>17)</sup>。これらの研究成果からは、青年期における自我の確立やそのための双生児一人ひとりの個性化には、別々の学校に通うことが必要だと言える。

一方で、双生児が一定の割合で校内や学年にいる附属中等教育学校は、双生児にとって中等教育段階を過ごす場所として一つの価値を提供していると考ええる。附属中等教育学校の学校環境は特殊な環境であり、自我の確立が遅くなる点に懸念も示されているが、収集・提示されている生徒や保護者の声は、附属中等教育学校での生活に対して一定の評価をしていると判断できる<sup>18)</sup>。

附属中等教育学校は大学教員との共同研究や校内での研究を通して、今日まで双生児研究の蓄積が続けている。個別の研究を含めて、これまで『双生児五〇〇組の成長記録から』『ピバ! ツインズ ふたごの親へのメッセージ』『ふたごと教育』を出版している<sup>19)</sup>。さらに2018年には創立70周年を記念した『双生児研究論集』を発刊した<sup>20)</sup>。こうした附属中等教育学校をフィールドとした研究や双生児に関して集められた知見からは、学校における双生児の多様な姿が示されている。

附属中等教育学校の双生児は同一の学校かつ双生児が多く在籍する特殊な環境にある。そのため、一般的

な学校に、同一校に二人で通う双生児、別々の学校に二人がそれぞれ通う双生児の場合とは異なるため、合わせた形での比較が必要となる。この比較・検討によって、学校と双生児の間にある関係がより明確化すると考える。しかし、附属中等教育学校以外をフィールドとした中高生に関する大規模な調査は限られているのが現状である。

### 3. 研究の目的

先行研究で述べたように、附属中等教育学校での双生児の学校生活や二人の関係については書籍等でも既に示されている。しかし、研究の中で双生児が過ごす環境としての附属中等教育学校が特殊である点も指摘されている<sup>21)</sup>。そのため、他の中等教育段階の学校に通う双生児の姿からも、学校生活やその環境が二人の関係や成長にどのような影響を与えるのかを明らかにすることが必要である。別々の学校で過ごす双生児もいれば、中学段階までは同一校で過ごしている双生児も多い。こうした学校が同一／別々で過ごす双生児の学校環境は、同一の学校に通っている場合でも、各学年に一定数の双生児がいる附属中等教育学校とは異なっていることが想定される。そこで、本研究では一般の学校に通う双生児がどのように学校生活を送っているのかに着目し、双生児の二人がその環境の中でどのような影響を受けながら成長しているのかの一端を明らかにする。そして、その結果を改めて附属中等教育学校での知見と合わせて中等教育段階の学校と双生児の関係を検討する。

### 4. 研究のデータ

#### A. 対象

本研究で扱うデータは、ツインマザースクラブの会報に寄せられた投稿記事をもとにしている。ツインマザースクラブは1967年に設立された「ふたご・みつご・よつごママのサークル」である<sup>22)</sup>。毎号2～3のテーマで原稿を募集して年4回会報を発行している。現在は2023年7月の270号まで発行済となっている。原稿はテーマを掲げて投稿を呼びかけ、自主的に投稿する場合や打診を受けて投稿する場合があるようである。投稿者名については記名の場合と匿名希望の場合がある。会報は本来会員間のものではあるが、1996年の146号から最新号まで国立国会図書館に所蔵されており、閲覧が可能となっている。今回、会報内容の

研究利用においてはツインマザースクラブに問い合わせをして許諾を得た。

#### B. データ収集

本研究では、中等教育学段階における双生児と学校に焦点を当て、資料を収集した。会報には毎回テーマに沿った原稿が集められているため、中学校・高等学校に関連するようなテーマが組まれた箇所やその他のテーマで投稿された記事中の中高生時代に関する話を資料として収集した (Table 1)<sup>23)</sup>。ただし、基本的には学校やそこでの生活が双生児にどのような影響を与えるかに焦点を当てているため、学校での出来事を列挙した活動記録や受験体験記、中学生や高校生に関する内容でも学校や学校生活に関係しない記事については資料から除外した。

また、資料の対象とする記事は過去約20年間の会報からの記事とし、2001年4月に発行された170号から最新号までと定めた。附属中等教育学校から2013年に出された『ふたごと教育』の掲載データとの間に一定の時代的整合性をとることを意図した。

### 5. 分析方法

#### A. 方法

資料の分析において、本研究では佐藤郁哉の質的データ分析方法を参考とした<sup>24)</sup>。第一段階として、収集した資料から一定の文章のまとまりを単位としたセグメントを作成する。第二段階でセグメントを概念コードへと置き換えていく。コーディングは二段階で実施し、思いつくままにコーディングをしていくオープン・コーディングをはじめに行い、次に焦点的コーディングによって抽象的・概念的なコードを作成する。最後に、第三段階で焦点的コードを比較・検討しながら、複数のコードをまとめてカテゴリーに統合する。

#### B. 本研究における分析の手順

対象資料を収集後、記事内で個人が「A児」「B児」やイニシャルでの表記などの匿名化がされているものはそのまま使用し、匿名化されていない名前はイニシャルをアルファベット1字に変換して表記した。そして、最初に資料を「同一の学校に通う双生児」と「別々の学校に通う双生児」に関する記事で二つの属性に分けた (Table 2)。これは本研究のテーマが附属中等教育学校とは異なる一般の学校において、同じ学

Table 1. 分析対象としたツインマゼースクラブの投稿記事一覧

番号	タイトル	テーマ	年	号	ページ
1	ツインの話いろいろ	男女の双子の不思議な関係	2001	170	10-11
2	十五の春	受験生をもって	2002	176	17-18
3	自己主張の中に……。	一卵性のふたごたち	2002	178	9-10
4	我が家の部活動騒動	ツインズは中学生	2003	179	8-9
5	流行をつくる二人	ツインズは中学生	2003	179	11
6	同じ高校へ…	高校生になった双子たち…	2003	182	10-11
7	それぞれ高校二年生	高校生になった双子たち…	2003	182	12
8	それぞれの道を歩み始めた双子たち	それぞれがちがう事をはじめるとき	2004	184	13
9	中学生！	いかがでしたか？ 一学期	2004	187	12
10	部活に燃えた息子達！ サポーターの母は楽しかった!!	おけいこごとの話、部活の話	2005	191	16-17
11	似て非なるもの、非にて似るもの	見かけはそっくり、でもこんなに違う二人	2006	194	20-21
12	トリプル受験……の三年前	ふたごの受験	2006	196	23
13	我家のふたごの高校受験	ふたごの受験	2006	196	23-24
14	別々の学校で伸び伸びと	ふたごの受験	2006	196	26-27
15	永遠のライバル	ふたごの受験	2006	196	27-28
16	娘たちの大学受験	ふたごの受験	2006	196	28-29
17	それぞれの道を歩み始めた双子たち一学期	一学期こんなことがありました！	2006	197	16
18	男女の双子も似ています！	男女の双子	2007	199	23-24
19	新生活始まる	新学期・新年度 こんなことがありました！	2007	202	8
20	永遠のライバル そして親友	うちの二人は仲が悪い?!	2008	208	14-15
21	ダブルスを組まされ陰悪に…	うちの二人は仲が悪い?!	2008	208	15-16
22	辛かった四年間	うちの二人は仲が悪い?!	2008	208	16-19
23	現在、高校1年生	二人は中学生	2009	209	26-27
24	やっと高校一年生になりました	二人は高校生	2009	213	12-13
25	かなりいい感じ	二人は高校生	2009	213	13-14
26	こんな高校生になりました	二人は高校生	2009	213	14-16
27	高校三年生	二人は高校生	2009	213	16-17
28	自分で選んだそれぞれの高校生	二人は高校生	2009	213	17
29	ただ今、思春期真っ最中	新しい環境にこうやって慣れました	2010	215	14
30	中学校部活生活無事終了報告	ふたごのクラブ活動	2011	219	5-6
31	剣道ひとすじ 六年間	ふたごのクラブ活動	2011	219	6-7
32	我が家のクラブ活動	ふたごのクラブ活動	2011	219	7
33	ひとりだけの受験	ふたごの受験・ふたごの就活	2011	223	5-6
34	双子の中学受験ドラマ	ふたごの受験・ふたごの就活	2011	223	6-7
35	それぞれの道に向かって	ふたごの受験・ふたごの就活	2011	223	13-14
36	二人の成長を見守りながら	二人の好きなもの、得意なもの	2014	232	12-13
37	中学生になった二人	新しい生活をスタートして	2014	233	8
38	名前を間違えられて…	学校に関するいろいろな事	2016	249	6
39	悩めます！	学校に関するいろいろな事	2016	249	7
40	二人だけの世界から広がって	ふたごの交友について	2020	256	4-5

〈使用したツインマザースクラブの投稿記事例 (No.20の一部)〉

うちの二人は仲がわるい？いやいやけんかはたえませんが、そんなふうにしたことは一度もありません。

でも、中学になり家庭訪問の際に担任の先生に「お二人は仲がいいですか？」と聞かれた話をふたりにしたら、「仲悪いし」って二人そろって言うんです。「エー！そうなの？」と驚き二人の話をよくよく聞くと…。二人の学年はツイングが五組もいて、双子も決して珍しくはありません。でも、だからこそ、比べられてしまうことをとても感じてしまうそう。

「みんなのことも比べているんだから私たちも比べられているんだろうなあ、と思うし、あまりべたべたいつもくっついていっているのもいやだから、いつてきまーす、とうちをでても、校門のそばにきたら微妙にずらして登校することもあるしー」なんて聞くと、「はあーやっぱりよ様はかわいくてたのしそでいいわね！とってくださるけれど、彼女たちは彼女なりに苦労しているんだなあ」と感じた瞬間でした。

春の体育祭でも、こんなことがありました。二人は陸上部で、体育祭では毎年リレー選手で活躍していましたが、今年は一〇〇M走でも偶然同じ組、リレーも一走とアンカーと走る順番をずらしていたのに、二人ともアンカーになってしまいました。先生に一〇〇M走はずらしてほしいとお願いしたらしいのですが、「姉妹対決はいーね！」と言われたそうで、内心親もどちらが勝つか見てみたいなんてお気楽に考え楽しみにしていました。リレーなんてふつうはアンカーの頃には差がでて、二人が接戦で競うことはないのですが、バトンがほとんど同時に渡され、本当に全校が盛り上がる一位争いでした。

校、別々の学校で過ごす双生児について検討するためである。

次に、二分した対象資料の文章をそれぞれセグメント化した。オープン・コーディングによってコードを付したものを、焦点的コーディングによってさらに概念的なコードへと置き換えていった (Table 3, 4)。この際、二分した分析対象間で可能な限りコードを揃えた。例えば、同じ学校に双生児が通う場合、別々の学

Table 2. 分析対象とした投稿記事の属性

番号	中／高	学校	部活	卵性	性別
1	中学	別々	別々	二卵性	異性
2	高校	別々	情報なし	情報なし	女子
3	中学	同一	別々	一卵性	男子
4	中学	同一	別々→同一	情報なし	女子
5	中学	同一	情報なし	情報なし	男子
6	中学	同一	同一	情報なし	男子
	高校	同一	情報なし	情報なし	男子
7	高校	同一	別々	情報なし	女子
8	中学	同一	別々	二卵性	異性
9	中学	同一	別々	二卵性	異性
10	中学	同一	同一	情報なし	男子
	高校	同一	別々	情報なし	男子
11	中学	同一	情報なし	情報なし	男子
	高校	別々	情報なし	情報なし	男子
12	高校	別々	情報なし	情報なし	男子
	中学校	同一	情報なし	情報なし	男子
13	中学	同一	情報なし	二卵性	男女
14	中学	別々	情報なし	一卵性	男子
15	中学	同一	同一	情報なし	男子
16	高校	同一	情報なし	情報なし	女子
17	高校	別々	別々	二卵性	男子
18	中学	別々	情報なし	二卵性	男女
19	高校	別々	情報なし	情報なし	男子
20	中学	同一	情報なし	情報なし	女子
21	高校	同一	同一	一卵性	男子
22	中学	別々	情報なし	二卵性	異性
	高校	別々	情報なし	二卵性	異性
23	高校	同一	別々	二卵性	男子
24	高校	別々	片方のみ	二卵性	女子
25	高校	別々	情報なし	一卵性	女子
26	高校	別々	片方のみ	情報なし	男子
27	高校	別々	情報なし	二卵性	異性
28	高校	別々	別々	一卵性	女子
29	中学	同一	同一	情報なし	男子
30	中学	同一	同一	情報なし	男子
31	中学	同一	同一	一卵性	女子
32	中学	同一	別々	情報なし	男子
33	中学	別々	情報なし	二卵性	男子
34	中学	同一	情報なし	情報なし	男子
35	中学	同一	情報なし	情報なし	男子
	高校	別々	情報なし	情報なし	男子
36	中学	同一	同一	一卵性	男子
	高校	同一	別々	一卵性	男子
37	中学	同一	情報なし	二卵性	異性
38	中学	同一	情報なし	一卵性	男子
39	中学	同一	情報なし	二卵性	女子
40	中高	別々	情報なし	情報なし	女子

校に通う場合で、双生児に何かメリットとなることは「双子であることによる利得」として同じコードを使用した。

作成された複数の焦点的コードをまとめてカテゴリーを作成し、最後にカテゴリーをまとめてカテゴリー・グループとした。コードを統合したカテゴリーおよびその上のカテゴリー・グループにおいても、「同一」「別々」の区分に関係なく使用できるものは共通した概念として示した。

## 6. 分析結果

### A. 同一の学校に通う双生児

分析の結果は「同一の学校」でセグメント数188、焦点的コード数23、カテゴリー数8、カテゴリー・グループ数4となった（Table 3, 4）。

《学校生活における双子関係への影響要因》：〈双子関係に負の影響を生む〉要因には「双子であることによる嫌な経験や思い」や「比較されることに対する拒否感情」を抱かせる〈外的要因〉と、「お互いに対する過剰な意識」や「自分の世界を守りたい思い」、〈双子間での競争意識〉による〈内的要因〉がある。一方で、〈双子関係に正の影響を生む外的要因〉もあり、「周囲からの注目や評価」や「双子であることへの周囲の羨望」は双生児を肯定的な見方である。そして「双子であることに対する周囲の理解」は双生児にとって大きな力となる<sup>25)</sup>。

《学校生活における双子の変化》：二人が同じ学校に通っていることで「双子であることによる利得」や「双子意識による相乗効果」があり、お互いの「学校に関する情報の交換・報告」は二人の関係を良好なものにする。そうした二人の関係は「双子であることの肯定」や「支援をし合う関係」になるなど〈双子関係の安定化や深化〉をもたらす。また、依存的な関係の一方で、同じ学校での生活をしながらも「自分の生活の確立」や相手に対する「自我の芽生え」は「お互いの個性尊重」につながり、二人の「自己意識の進展」を促す。

ただし、同じ学校での生活は「周囲の目を気にした行動」を二人にさせ、双生児であることが知られないように〈双子関係の隠秘〉を促す面もある。周囲からの双生児としての同一視や比較は、「双子間での優劣への反発」や「同じ学校生活や活動における葛藤」を生む。思春期は一般児であっても悩むのに加え、双生児の場合には「相手の学校生活による影響」も受ける

ため、「双子関係や二人の不安定化」につながる。

《双子が学校に与える影響》：双生児が学校にいてことで、「学年の雰囲気や双子が形成」する点は〈双子が学校に与える影響〉である。双生児を介した生徒の結びつきが生まれ、学年や学校を形成するファクターになる<sup>26)</sup>。

《学校選択の動機》：同じ学校に通う双生児は学校生活の中で、二人に影響を与える外的・内的な要因があり、周囲から「双子」として同一視や比較されることから「双子とする認知への反発」をする。そして「自我の確立や個性の承認に対する欲求」を強くもち、それが「別々の学校を選択する動機」となっていく。

### B. 別々の学校に通う双生児

分析の結果はセグメント数97、焦点的コード数17、カテゴリー数8、カテゴリー・グループ数3となった（Table 5, 6）。

《学校選択の動機》：別々の学校を選択した双生児は、何よりも「二人が別々に過ごす学校生活への希求」が学校選択において優先的にある。同一校での生活の中での「双子とする認知への反発」が自我の確立や個として承認欲求を満たすために「別々の学校を選択する動機」となる。それに対して、双生児の関係が安定し、二人でいることがお互いの利益になる場合には「二人が同じ学校での生活の希望」をもち、〈同じ学校を希望する動機〉となる。

《学校生活における双子関係への影響要因》：別々の学校に進学しても、〈双子関係に負の影響を生む外的要因〉に「双子に対する周囲の無理解」や「双子の相手に対する周囲の興味」がなくなる訳ではない。そこに「二人の間での優劣の意識」や「自己形成期の葛藤」が〈双子関係に負の影響を生む内的要因〉として双生児の二人の間に在り続ける。

別々の学校に通うことによる正の影響を生む内的・外的要因は概念化されなかった。これは「別々の学校での個々の生活」という学校が別々であることそのものが要因となっていると推測する。双生児の二人が別々の学校に通うことの必要性は従来から指摘されていることである。

《学校生活における双子の変化》：別々の学校に通うことは、双生児にとっては相手とは離れた〈個としての学校生活〉である。自分の「個性に合った学校生活」を送り、「個としての周囲と関係の構築」を進める生活は「双子であることや相手を気にせず過ごせる学校生活」となる。

Table 3. 「同じ学校に通う双生児」の概念化とデータ例

「焦点的コード」	記述データの例	記事番号
双子であることによる嫌な経験や思い	<p>女子に比べられて嫌だった。Yの方がモテるので、くやしい。俺はこわいって言われるん中学校に入学してすぐ、上級生から『双子、双子』とからかわれたことがとても嫌だったようで、特にBは『Aと歩きたくない!』『同じ部活（二人とも剣道部）は嫌や!』とずっと言っていました。</p> <p>同じ小学校の友達などからクラスの友達に知られ、Kのクラスの友達やクラブの先輩などがHのクラスに見に来た時は、本当にイヤだったようです。</p> <p>同じ学校でそっくりの二人は先生に何時も間違えられ、あまり気分はよくなかったようです。</p> <p>先生に一〇〇M走はずらしてほしいとお願いしたらしいのですが、「姉妹対決はいーね!」と言われたそうで、内心親もどちらが勝つか見てみたいなんてお気楽に考え楽しみにしていました。</p> <p>前から僕たち別の顔だよと言って、本人たちは似ていると思っていない様ですが、ふたごはそんなことでイヤな思いをするんだなと思った瞬間でした。</p> <p>顧問の先生が、ふたごなら息もピッタリだろう（それに、右利きと左利き!）と期待して（そう思われますよね…）早速ダブルスのペアを組ませてしまったのです。</p>	3, 6, 8, 11, 20, 21, 35, 38, 39
比較されることに対する拒否感情	<p>B子（お目々ぱっちり色白ロングヘアーでいつもニコニコ愛想良し）は男女学年問わず皆に「かわいいね」と言われるのに対し、A子（一重まぶた、ショートカット、メガネ）は「本当に双子なの?」「似てないね」等々。</p> <p>二人の学年はツインズが五組もいて、双子も決して珍しくはありません。でも、だからこそ、比べられてしまうことをとても感じてしまうそう。</p> <p>学校に行けなくなったことに関して、ほとんど何も話さないAでしたが、「どうして学校に行きたくないのか?行けないのか?」と聞かれたときに、ひとつだけ決まって息子が口にしたことがあります。「Bと比べられて嫌だ」と言うことでした。</p>	20, 35, 39
お互いに対する過剰な意識	<p>今回の受験もお互いに対する反発が原動力になって、二人とも志望校合格を果たしたと思うのですが、本人たちがお互いを認め合う日はまだまだ先のようです。</p> <p>学校生活は順調でしたが、二年生になってA児の方が成績の差にひどく敏感になりました。</p> <p>私の問いかけにうなずいたのは「Bに負けたくない?」と聞いた時だけでした。</p> <p>他人ならだれに負けても気にしない。だが双児の相手には負けたくない。その気持ちがとても強く出る時期だったのでしょう。</p> <p>精神的にまだまだ幼いのか、それとも双子にしかわからない特別の感情があるのか、いずれにしてもお互いに自分のことしか考えていないから喧嘩になるのでしょう。</p>	15, 20, 29, 34
自分の世界を守りたい思い	<p>A児の立場に立って考えてみれば、入部後一年がたち、部活になれ、部活内の人間関係も安定してきた時、B児が入部するのは本当にいやなことだったのでしょう。</p> <p>小さい頃と違いお互いの世界があまり重ならないようになってきていたところで、また一緒に部活というのは自分のテリトリーをおかされるようでいやだったのでしょう。</p>	4
双子間での競争意識	<p>勉強もそこそこできて、優しいA子なのに、自己肯定感が低く、劣等感が大きいのです。</p>	39
周囲からの注目や評価	<p>二人を含めてバンドを作り、メンバーに恵まれて良い演奏ができ、喝采をあげたのがとても嬉しかったようです。</p> <p>小学生時代から高校生になった今でも、「仲の良い双子の兄弟がいる」と、いつも学校で有名になる二人です。</p>	23, 36
双子であることへの周囲の羨望	<p>もちろん、けんかすればそこまで言うか、と思うほど凄いや言葉の応酬がありますが、周りのお友達には「双子っていいな。私も双子だったらよかった。」とうらやましがられることもあるようです。</p>	23, 36
双子であることに対する周囲の理解	<p>部活の中でもはライバルではあるけれどお互いに気づかいあって過ごせたのは本当に仲間のおかげでした。</p>	10
双子であることによる利得	<p>A児にしても暗い道を一人で帰ってくることもないし、いやなことばかりではないと気づいたのでしょうし、半年もたつとあきらめがついたのでしょう。</p> <p>今ではKのクラブの先輩とHがメールのやりとりをしているなど、お互いいいところは利用し合っているようです。</p> <p>例えば、試験の前など、問題を言い合ったりして協力して勉強ができます。プリントを失くした時、もう一人のをコピーできます。学校で、忘れ物をしたとき、遠慮なく借りることができます。</p>	4, 8, 30, 34
双子意識による相乗効果	<p>Sは部活のない日には一人で走りに行き、入浴前の筋トレ、入浴後のストレッチと体調管理に余念がありません。Kは夕食後に壁当てや素振りをして頑張っています。</p>	32

Table 3. 続き

「焦点的コード」	記述データの例	記事番号
学校に関することの情報交換・報告	<p>それなのに、家ではお互いの部活のこと、クラスの事、テストの情報等、しっかり交換している。</p> <p>クラスが違うので、家に帰ってから、お互いにクラスメートのことや面白い出来事を相手に話したりして、話題はつきません。</p> <p>AとBは同じ学校に通いながら部活や友だちは別でしたが、家ではよく話をして、たわいない話で盛り上がったり、二人でギターを弾いて歌ったりしていました。</p>	9, 34, 36, 37
双子であることの肯定	<p>世界で一番大切な人はお互い、とハッキリ私に言い毎日楽しそうにオシャベリする二人をながめるのは幸せです。</p> <p>自己を確立できるようになったから、中学の時より仲良くなった。</p> <p>二人はライバルではあるけれど自然な形で認め合えた三年間でした。</p> <p>二人は永遠のライバルであり、分かれ合える親友だし、大切なけんか友達(?)でしようか。</p>	3, 5, 6, 10, 12
支援をし合う関係	<p>先頭に立ってという人ではありませんが、私はBの存在がAを助けているなあと思う事が時々ありました。</p> <p>二人を見てみると、つらい時の方が同学年としてよく相談したりなぐさめたりしていように思います。</p> <p>小さい頃は生活の中のささいなことでも言動のはしばしにライバルを感じさせた二人が、今はきっと私以上にお互いの一番のサポーターなんだと思います。</p> <p>合計点が少ない子は、少しでも追いつこうとがんばったり、かなわないと落ち込みイライラしたり、マイナス思考になったりや忙しく、そんな彼女を「今からそんな風に決めないで上をめざそうよ」と片方が励ましたり。</p> <p>A子は女子の主将になってから胃炎になったりして、プレッシャーもあったようですが、そこはB子が相談相手になっていたようでした。</p> <p>同じ学校でA男はすべてを知っていたのに絶対にもらさないので。何年かたってA男にB男のいじめについて聞くと、「だってそのことを言うとBがダメになるし、言ったってB自身が自分で解決しないとうどうにもならない」と。</p>	10, 11, 20, 30, 31
自分の生活の確立	<p>高校生になった今は、長男はギター部に入り、次男は卓球部を続けています。高校は、中学と違って授業についていくのが大変ですし、通学も中学生時代は徒歩五分でしたが、今はバスと電車で片道五十分かかります。それでも、クラブ活動が楽しいので、二人とも休まず学校に通っています。</p>	23
自我の芽生え	<p>先英検の二次試験とサッカーのセクションが重なってしまいました。本人たちに選ばせましたが、A児は迷わずセクションを選び、Bは英検を選びました。</p> <p>結果的には同じ高校へ進学となりましたが、各々自分の考えで進路選択した事で、私も早く別々の道へと思う気持ちが薄らいできました。</p>	29, 31
お互いの個性の尊重	<p>「あ、高校になって初めてそっくりな双子に出会った。いつも二人一緒に、鞆・靴・携帯・自転車そのほか、色も形も全部同じ、髪型も同じ！俺らは全然違う。個がある」</p>	6
周囲の目を気にした行動	<p>中学三年の時、小学校五年の時からかけていた眼鏡をコンタクトにしてからは、あまり間違われなくなりましたがAと一緒にいるのは避けていました。</p> <p>顔が似ていて人目が気になるらしく、中学頃から電車はわざと別の車両に乗るし、登校時も少しずれて出て行くし、外では「え、そこまで？」とよそよそしくしていました。</p> <p>ただ、学校ではすれ違っても、知らん顔をしているし、登下校も必ず別々です。たまたま一緒になっても、50mは離れて歩いています。</p> <p>ふたごを見る目を意識しすぎるのか、「ドンマイ」などの声かけも素直にできないらしいし、友達と組むのとは違い、相手へは我慢ができず、何も良いことがない様子。</p>	35, 39
双子間での優劣への反発	<p>反対に面白くないのがA児。B児の姿に逆らったように勉強しなくなりました。そしてB児の習っている先生の方が教え方が上手だからと言ってみたりして、B児に負けたくないからといって地道な努力はイヤという態度が見え隠れです。</p> <p>二人とも何とか推薦枠に入ったまではよかったのですが、最初から行くときめていたAが不合格で、Bが合格したのです。その日は郵送で通知があり、家に帰ると不合格の通知をビリビリに破ってしまいました。</p>	6, 29
同じ学校生活や活動における葛藤	<p>ついに「学校に行きたくない」が始まりました。この原稿のお話をいただいた少し前から始まり、半月が過ぎましたが、毎朝、静かなバトルが続いております。</p> <p>同じ中学、同じ部活になる事がわかった時の私のとまどい、キャプテンの責任を負いつつ、Bとの関係に悩むAの様子をそれぞれ会報に書かせて頂きました。</p>	30, 35, 39
相手の学校生活による影響	<p>BもAが不登校になったことで、深く傷ついていたことと思います。</p>	35

Table 3. 続き

「焦点的コード」	記述データの例	記事番号
学年の雰囲気や双子が形成	天羽会長もおっしゃったとおり、中二の息子たちは学年の流行をつくり出します。	5
双子とする認知への反発	男女のふたごで全く似ていないこともあり、黙っていればそれと気付かれない。女兒はこれはいい機会と捉え、「知られたくない!」といった様子。 自分は自分になりたい。もう一人の片割れと思われるのはもう、ゴメンだと思っていたようです。 二人は別の高校に行きたいんです。もう比べられることから卒業したいんだと思います。「双子」とか「兄弟」と言われることが二人とも嫌いなので、中学は、別々の所に通いたいという気持ちもあったようですが、	5, 8, 9, 11, 13, 15, 16, 20, 34, 35
自我の確立や個性の承認に対する欲求	自分はこうだよ! 比べないで、と思っていたんだと心にとめておきたいと思いました。それぞれ別の友達関係をつくりながら、“自分自身”を見てほしいと常に思っているように感じます。 幼稚園から中学校までずっと比べられたり、間違われたりしてきたので、高校からは別の場所です。「一人」として扱われたいと強く思っていたようです。	3, 15

Table 4. 「同じ学校に通う双生児」のカテゴリ

《カテゴリ・グループ》	〈カテゴリ〉	「焦点的コード」
学校生活において双子関係への影響要因	双子関係に負の影響を生む外的要因	双子であることによる嫌な経験や思い 比較されることに対する拒否感情
	双子関係に負の影響を生む内的要因	お互いに対する過剰な意識 自分の世界を守りたい思い 双子間での競争意識
	双子関係に正の影響を生む外的要因	周囲からの注目や評価 双子であることへの周囲の羨望 双子であることに対する周囲の理解
	双子関係の安定化や深化	双子であることによる利得 双子意識による相乗効果 学校に関する情報の情報交換・報告 双子であることの肯定 支援をし合う関係
学校生活における双子の変化	自己形成の進展	自分の生活の確立 自我の芽生え お互いの個性の尊重
	双子関係の隠秘	周囲の目を気にした行動
	双子関係や二人の不安定化	双子間での優劣への反発 同じ学校生活や活動における葛藤 相手の学校生活による影響
	双子が学校に与える影響	学年の雰囲気や双子が形成
学校選択の動機	双子が学校に与える影響	双子とする認知への反発
	別々の学校を選択する動機	自我の確立や個性の承認に対する欲求

それぞれが「個として学校生活」を別々の学校で送ると、学校が異なることで生じる学習進度の差が「双子であることによる利得」につながることや、自分の知らない「お互いの学校生活についての情報交換・報告」は二人にとって楽しい時間となる。また、それぞれの学校での悩みや困難には、少し距離が空いたことで「支援をし合う関係」になれ、「双子であることの

肯定」をする「双子関係の安定化や深化」が起こる。さらに、双生児間の結びつきはそれぞれの交友関係を結びつける紐帯の役割を担うため、「双子であることによる交友関係の広がり」が二人の「交友関係の発展」をさせる。

一方で、別々の学校に通う二人の間で〈双子関係や一人の不安定化〉が起こる場合もある。相手への攻撃

Table 5. 「別々の学校に通う双生児」の概念化とデータ例

「焦点的コード」	記述データの例	記事番号
二人が別々に過ごせず学校生活への希求	三年前の中学校の時、成績が同じくらいだった二人は、受験する高校に同じ普通科高校を選びましたが「別々の高校に行きたい!!」という気持ちが二人ともに強かったので、最終的にはあっさりとしてB児の方が工業高校に変えました。 「同じ高校には行きたくない!」と、我が家の息子たちは、この春、学区違いの公立校をそれぞれ選んで高校生活をスタートさせました。	12, 17
双子とする認知への反発	二人とも双子だと知られたくないので隠していたようです。 Aは高校で双子だということを公表したくないと言い、担任にも知らせていません。	18, 26
二人が同じ学校での生活の希望	小さな時から中学を卒業するまで、双子だというだけでも目立つのに、身体も大きく、少々大人びたところがあり、先生たちからも周りのお友達からも一目置かれた存在で、親子で「いい思い」をして過ごしてきました。	26
双子に対する周囲の無理解	春に、「ねえ、この年でお母さんと話をしてたら可笑しいの? A子と話したり遊んでたらおかしいの?」と聞かれ、「別に普通でしょ。一緒に暮らしてるんだから当たり前のことじゃないかな。」と返事をしたのです。	22
双子の相手に対する周囲の興味	「学校で、兄弟の話をしていて、双子だっていうと、会ってみたいと言われるんだ。変だと思わない? 同じ日に生まれただけで、普通の兄弟とかわからないのね。」 話さなくなる数日前にも言われ、とうとう、「女となんか話すもんか。」となった訳です。思春期、同じ年の女のきょうだい、もう周りは興味津々だったと思います。	1, 22
双子間での競争意識	Aにとってはやはり少しは傷ついたようで、入学式の日に、「ここ落ちこぼれの学校だ。大学でもう一度受けるよ。」とつぶやいたのは驚きました。 なんと両方が学校では「自分が上だ。」と言っていたらしく娘の友達には「今度、弟に会いに行ってい?」と言われ息子の友達には、「妹を紹介してください。」と言われ、私、「?」の時がありました。	18, 26
自己形成期の葛藤	今まで何から何まで同じ土俵の上で同じ事やってきて、初めての違うところで自分は違うと言うことの表現が他の人より激しく出るんじゃないかな、というのです。	26
個性に合った学校生活	今は、勉強も五の次位にはして欲しいとい願う親の心配空しく、サッカーの部活中心の毎日で、伸び伸び青春しています。 身体も大きく、委員会活動もして目立つA児と離れたB児の新生活は、双子の一人という呪縛が解かれて以前よりも自分の個性を素直に出しているように感じています。 そんなときはすべてに自信をなくしてしましますが、部活を中心に学校生活を送ってきて自分を表現する居場所をみつけ、少しずつ自信をつけてきたようにも思います。	17, 28
個として周囲との関係づくり	A児はあまり事細かに話をしてくれない事に私も気が付きまして。面談や授業参観に行くと、他のクラスの子や担任以外の先生も挨拶したり、話をしたりしているのです。	24
双子であることや相手を気にせず過ごせる学校生活	生まれて初めて別々の学校に通うことになって、自ら双子の姉妹がいると申告しない限り、双子という環境から解放されている、それが愉快だ、といいます。 二人は高校になって初めて別々になり、相手を気にせず、ひとりひとりの生活ができるようになりました。 中学まではよく人にまがいわれ、いわなくてもみんなに「双子」だと知られていたのに、高校になり「誰も[ぼくが]双子だと知らない」と二人ともうれしそうに話していました。私も双子を生んでよかった! とまた実感しました。 二人は、中学校からの部活動をそのまま継続しながら、新しい学校生活をのびのびと楽しんでいる様子です。 別々の高校でよかったと思ったものでした。そんな意識過剰な面からも、別々の生活が始まったことで、解放されたんだなあと思っています。 こんなふうにお互い初めて比較や干渉をされない環境の中で、のびのびと学校生活を送ることができたようである。	1, 2, 11, 12, 14, 19, 25, 27, 28, 35
双子であることによる利得	授業の進み方が違うのでたまにはお互いに教えあったりということが出来ます。 日々の学習の仕方や定期テスト対策など、Bは受験経験者のAからいろいろなアドバイスを受けられるというメリットがあることにも、最近気づきました。	1, 33
お互いの学校生活について情報交換・報告	それぞれが、別の空間で過ごす事ができるので、学校から帰って来ると、学校の事、友達の話など、楽しそうに話すようになり、けんかをする事も全くなくなりました。 A児とB児は、毎日お友達の様子、部活の様子、先輩の事、先生の事、電車の事、沢山話してくれます。 そういえば、学校から帰るとお部屋に直行して二人で長いことそれぞれの一日を報告し合っているようです。 男女の双子ということでどうなるかなと思っていたが、けんかは当然するけれど、お互いの学校での情報を交換しあったり洋服のことを話し合ったりCDを交換したりと仲良くもやれている。	14, 19, 24, 25, 27, 35

Table 5. 続き

「焦点的コード」	記述データの例	記事番号
支援し合う関係	Bに「なんであんな生活をしているんだろう。どう思う？何か話す？」と聞いても「俺にそんな事言われても困るよな。何にも話さないよ」と言うだけです。小さな時からお互いの告げ口は決して言わない二人です。 「親に話さなくても話し合いのできる兄弟がそばにいるからいいわね」といわれました。	26
双子であることの肯定	中学生の時は、喧嘩ばかりしていたのに、高校のお友達にも、双子で二卵性の事も話、「文化祭を見に来てね!」と、誘い合っています。 二人一緒に行動はほとんどしなくなりました。でも部屋で二人、C Dにあわせてギターの合奏をやったり遅くまでなにやら話している声が聞こえたりします。 小さい時からよくけんかもした二人ですが、お互いの学校の話をしたり、文化祭などの行事にでかけ、（本人たちは似ているとは思っていないらしいですが、一卵性なので他人から見るとかなり似ている!）友だちの反応を楽しんだり、少し距離をおくことで余裕ができたように思います。 長女が悩んでいる時、ポソッと私に言った「私の一番の親友はA児（次女）かもしれない」の一言は私の心に残っています。 そうした生活の中で、二人一緒にいる時間の楽しさがわかり、それを大切にしようとしているのかもしれません。	1, 24, 25, 26, 28, 33
双子であることによる交友関係の広がり	Aのように私立中学に行ってしまうと、小学校時代の友達とは疎遠になってしまうようですが、Bは地元の公立中学に通っているの、家に連れてくる友達は小学校時代の共通の友達でした。それで夏休みには久しぶりの再会で、皆、楽しく遊んでいました。 「おたくの友達の友達はみな友達」? という感じで、交友関係がクロスオーバーしていきました。それぞれの学校の友達と遊びにくときも、友達の方から「A子ちゃんも来ない?」とか「B子ちゃんも一緒に」と声をかけてもらいました。	33, 40
双子であることの否定	最初にはA子を無視する程度だったのですが、（それでも私は許せませんでした）そのうち罵詈雑言がT男の口から出るようになりました。	22
双子であることに対する反発	夏休みの少し前に茶髪になり、しばらくしてからピアスが一個二個三個と増え始め、あれよあれよという間に俗に言う「不良高校生」の姿になりました。	26

Table 6. 「別々の学校に通う双生児」のカテゴリー

《カテゴリー・グループ》	《カテゴリー》	「焦点的コード」
学校選択の動機	別々の学校を選択する動機	二人が別々に過ごせる学校生活への希求 双子とする認知への反発
	同じ学校を希望する動機	二人が同じ学校での生活の希望
学校生活における双子関係への影響要因	双子関係に負の影響を生む外的要因	双子に対する周囲の無理解 双子の相手に対する周囲の興味
	双子関係に負の影響を生む内的要因	双子間での競争意識 自己形成期の葛藤
学校生活による双子の変化	個としての学校生活	個性に合った学校生活 個として周囲と関係の構築 双子であることや相手を気にせずには過ごせる学校生活
	双子関係の安定化や深化	双子であることによる利得 お互いの学校生活について情報交換・報告 支援し合う関係
	交友関係の発展	双子であることの肯定
	双子関係や一人の不安定化	双子であることによる交友関係の広がり
		双子であることの否定
		双子であることに対する反発

をする「双子であることの否定」や個性を出そうとして「双子であることに対する反発」も見られる。

## 7. 考察

双生児やその保護者にとって、同じ学校に入学することが多い小学校時代とは異なり、中等教育段階では居住地域によって中学受験も可能となる。ただし、Table 2からは中学校は二人で同一の学校に通学する傾向が示されている。そのため、本格的に同じ学校か別々の学校かの選択は高校進学時になされる。

本研究においてツインマザースクラブの保護者の投稿記事を分析した結果、中等教育段階の双生児と学校との関わりには、次のような展開を指摘することができる。

- (1) 同一の学校で「双子」としての学校生活を送る
- (2) 「双子」ではなく「個」としての学校生活を求める
- (3) 別々の学校を選択する
- (4) 学校外（家庭等）でお互いの関係が安定化や深化する

(1)～(4)の展開は、自我が確立される青年期の発達を考慮しても、双生児にとって正の影響を与える学校との関係の在り方だと言える。その点は先行研究でも指摘されてきた点であり、双生児二人の競争意識やアイデンティティの確立の観点に立てば、別々の学校で生活を送った方が二人の心理的な成長は促される<sup>27)</sup>。また、二人の能力が異なる場合にもできるだけ二人を分けて生活させた方が良いとされている<sup>28)</sup>。

それならば、先行研究が指摘するように双生児は別々の学校に進ませた方がやはり良いのだろうか。分析結果からわかることは、二人の成長において影響を及ぼす双生児間の内面的な要因だけではなく、学校生活における周囲との関係による環境的な要因の大きさである。比較されることを気に病む、相手に対して劣等感を抱くこと自体は二人の関係性や個人の性格による内面的な面でもあるが、双生児に「双子」を意識させる要因は周囲からもたらされる。学校生活の中で起きる比較や同一視、相手との誤認に対して本人たちが感じている思いに、周囲の生徒や教師が至らない（至れない）。それが時に双生児である生徒をアイデンティティの危機に直面させ、「双子関係や二人の不安定化」を引き起こす。

しかし、分析からは別々の学校、同一の学校に関係なく「双子関係の安定化や深化」が起こっている。またカテゴリーとして〈自己形成の進展〉があるのは同

一の学校における双生児の方である。これは別々の学校で「個としての学校生活」の前段階として位置づく場合もあるが、同一校での生活の中で進展する可能性もある。

それでは、少し特殊な同じ学校での生活となる附属中等教育学校の事例ではどうなるのだろうか。附属中等教育学校の双生児を入学させた保護者は選択した理由に「双生児が特別視されない」と思ったことをあげている<sup>29)</sup>。附属中等教育学校の生徒や教師は双生児が多くいる環境のため、見分けることに慣れているのではないかと指摘されており、とくに生徒同士では自然と別な一人として双生児の一人ひとりと接している<sup>30)</sup>。そのため、同一校で6年間を過ごす、その中でも個性を伸ばすことができる。「双生児がたくさんいるので別にふたごが特別なことではないと思えたらしく、ふたごで生まれても自分は自分という個性を主張しはじめたなあと感じました」という保護者の言葉もある<sup>31)</sup>。この点は附属中等教育学校が、双生児が同じ学校で過ごす環境でありながらも特異な点である。

分析結果と附属中等教育学校の双生児に関する知見を合わせて検討すると、必ずしも同じ学校で生活を送ること自体が問題なのではないと言える。附属中等教育学校が学校生活の中で二人の個性を育むことができているのであれば、別々の学校である必要はなく、個性が自然に認められる学校環境であることが重要になってくる。双生児の二人が、「双子」とそれぞれの「個」に対する周囲からの理解がある中で生活を送ることが学校には求められてくる。そのためには、双生児の割合が今後増加していくとき、①教師をはじめ、生徒（一般児・双生児）を含めた学校全体が現在以上に双生児に対する理解を深める必要があると考える。そして、当然ではあるが、②二人の性格や関係性、友人関係の在り方と学校環境が合致することが大切となる。とくに周囲の友人との関係は欠かせない要素である<sup>32)</sup>。現在はかつてのような双生児が忌避されるような時代ではなく、むしろ「双子性の表出」が双生児以外でもなされる時代である<sup>33)</sup>。双生児についての理解が今以上に学校で進むことは、双生児にも一般児にもより良い環境が学校生活の中で生まれることにつながる。

## 8. 今後の展望

中等教育段階の双生児と学校との関わりを整理して示せたことと、附属中等教育学校の知見と合わせて上

述の①・②を分析成果から改めて指摘出来た点が、ツインマザースクラブの会報を資料として取り組んだ今回の研究の意義である。

しかし、今回の分析においては、結果で同一の学校に通う〈双生児が学校に与える影響〉のカテゴリーについて十分に触れることができなかった。現象としてはこれまでも捉えられているものの、今回も概念化するに留まってしまった点は今後への課題である。

データについては、資料が投稿記事の性格上、卵性が語られていない場合もあった。言及されている卵性についても、判定のレベルを検証する術がなかった。また、中等教育段階を一つの枠組みとしてデータを扱ったが、中学・高校段階では発達段階に差があることを考慮できなかった点は双生児研究として改善の余地が残る部分であった。データの分析の点でもトライアンギュレーションの部分で十分なものではなかった。附属中等教育学校のデータに対しては同様の分析をした上で比較することが研究成果の信頼性を高め、更なる成果につながると考える。

## 謝辞

本研究ではツインマザースクラブの会報を資料として利用させていただきました。利用にあたってはツインマザースクラブ、そして杉浦祐子会長にお世話になりました。ここに御礼申し上げます。

## 注

- 1) 東京大学教育学部附属中・高等学校（以下、附属中・高等学校）編 1995.『ビバ！ツインズ』東京書籍, pp.243-248.
- 2) 日本経済新聞「日経速報ニュースアーカイブ」2022年9月24日。
- 3) 大阪大学大学院医学研究科附属ツインリサーチセンターのウェブページ<https://www.med.osaka-u.ac.jp/pub/twin/>（最終閲覧2023年9月27日）。
- 4) 日本経済新聞, 前掲（2022）。
- 5) 東京大学教育学部附属中・高等学校（以下、附属中・高等学校）編 1978.『双生児—500組の成長記録から』日本放送出版協会, pp.11-15.
- 6) 例えば、日本双生児研究学会第37回学術講演会（就実大学会場）では第2セッションと第3セッションの計5本の発表が多胎家庭の支援等に関係するものであった。『日本双生児研究学会第37回学術講演会抄録集』（就実大学, 2023年2月4日）参照。
- 7) 『2023年度 学校要覧』東京大学教育学部附属中等教育学校, pp.26, 27.
- 8) 注3参照。
- 9) 国際的にも双生児のレジストリの一つとしてリストに掲載されている。Hur, Y.-M., Bogl, L.H., Ordoñana, J.R., Taylor, J., Hart, S.A.,

- Tuvblad, C., Ystrom, E., Dalgård, C., Skytthe, A. and Willemsen, G. “Twin Family Registries Worldwide: An Important Resource for Scientific Research”, *Twin Research and Human Genetics*, Volume 22 - Special Issue 6, Cambridge University Press, December 2019, 427-437, Table 21.
- 10) 双生児研究委員会 2005.「東大附属における初期双生児研究の歴史(井上英二先生講演記録要旨) —双生児入学特別検査の経緯を中心に—」『東大附属論集』第48号, 東京大学教育学部附属中等教育学校, pp.73-77.
  - 11) 三木安正・波多野誼余夫・久原恵子・井上早苗 1963.「双生児による人格形成の研究：Ⅰ」『教育心理学研究』11巻3号, pp.142-151. 三木安正・波多野誼余夫・久原恵子・井上早苗・江口恵子 1964.「双生児による人格形成の研究：Ⅱ」『教育心理学研究』12巻1号 pp. 1-11. 三木安正・久原恵子・波多野誼余夫・高橋恵子 1969.「生児による人格形成の研究：Ⅰ」『教育心理学研究』17巻4号, pp.193-202.
  - 12) 天羽, 前掲書（2001）, p.256.
  - 13) 双生児研究委員会・詫摩武俊・天羽幸子1999.「双生児の競争意識について」『東大附属論集』42号, pp.33-40. 天羽, 前掲書（2001）.
  - 14) ブライアン, エリザベス（三浦悌二監修, ツインマザースクラブ訳）1992年.『ふたご・みつごの発育と育て方』ビネバル出版, p.99.
  - 15) 天羽幸子 1988.『ふたごの世界 双生児の二十五年の追跡研究』ブレイン出版, p.200. 天羽幸子 2008.『新 ふたごの世界』ブレイン出版, pp.176, 177.
  - 16) ツインマザースクラブ会報255号（2019年10月発行）の講演会報告『「思春期のふたごの個性の発達」～追跡調査の結果から～』（講師：お茶の水大学 菅原ますみ先生）, pp.15, 16.
  - 17) 天羽, 前掲書（2001）, p.263.
  - 18) 東京大学教育学部附属中等教育学校（以下、附属中等教育学校）編 2013.『ふたごと教育』東京大学出版, pp.84-91.
  - 19) 附属中・高等学校編, 前掲書（1978, 1995）及び附属中等教育学校, 前掲書（2013）.
  - 20) 東京大学教育学部附属中等教育学校編 2018.『創立70周年記念 双生児研究論文集—東大附属論集編集版—』東京大学教育学部附属中等教育学校.
  - 21) 天羽幸子 2001.「第3章 青年期の相互関係」『ふたごの研究 これまでとこれから』ブレイン出版（詫摩武俊・天羽幸子・安藤寿康）, p.250.
  - 22) ツインマザースクラブ<http://www.tmc-japan.org/>（最終閲覧日9月28日）.
  - 23) 会報はすべてツインマザースクラブの編集・発行であり、対象資料の出典情報はTable 1とする。
  - 24) 佐藤郁哉 2008.『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社.
  - 25) 天羽は小学校時代の双生児の息子について、双生児であることを隠すことなく、特権のようにして過ごせたのは周囲の理解によるものだとしている。天羽, 前掲書（1988）, pp.146, 147.
  - 26) 天羽, 前掲書（1988）, p.136. 附属中等教育学校, 前掲書（2013）, p.53. 南澤武蔵・大井和彦・對比地寛・関塚洋子・磯谷由希 2023.「双生児が学校環境に与える影響について」『日本双生児研究

学会 第37回学術講演会抄録集』(2023年 2 月 4 日, 就実大学).

27) 注17参照。

28) プライアン, 前掲書 (1992), p. 88.

29) 附属中等教育学校, 前掲書 (2013), p.87.

30) 附属中等教育学校, 前掲書 (2013), p.88.

31) 附属中等教育学校, 前掲書 (2013), p.89.

32) 天羽, 前掲書 (1988), pp.213-215.

33) 南澤武蔵 2023. 「「双子性の表出」に関する一考—歴史の中の  
双子を求めて—」『東大附属論集』第66号, pp.144-155.